

スーパー生木小噺 ver. 1.1

2023.04.05

この度はご来場いただきありがとうございます。

ここに展示されているうつわやスプーンなどは、グリーンウッドワークという手法でつくっています。

厳密には電気も使わず手道具で生木を加工するものづくりをグリーンウッドワークと呼ぶことが多い気がしますが、スーパー生木ラボでは、生木を使う木工をグリーンウッドワークと呼んでいます。素材の産地は米原8割、ほか2割ほど。ローカルな原木生木をふんだんに使用しています。



↑こういう丸太から制作しています。

グリーンウッドワークは未乾燥の生木を使う木工で、昔から国内外で行われてきました。

日本だと飛騨高山の有道杓子(うとうしゃくし)はホオノキの生木から、石川県山中では栗の生木から我谷盆が作られていたことは有名です。



41, 有道杓子 (日本道楽機構文化財) (画像1)

随筆家の白洲正子さんに言わせれば杓子の王様は有道杓子だそうで、実際かっこよく、確かに王者の風格があります。

気になる方はネットで調べたらすぐ出てくるのでぜひ。

—

ちなみにどれくらい昔からグリーンウッドワークがあったのかと言うと、たぶん縄文時代にはあったんじゃないかと思います。諸説あるでしょうけど、乾燥の技術もなかったかもしれないし、竪穴式住

居に使っていたとされる丸太も生木のまま加工してたのでは？と考えたりするとワクワクします。



↑吉野ヶ里遺跡

弥生時代の遺跡からはオタマやスプーン、フォークなども出土品として発見されているし、昔から暮らしに根付いた木工だったことは間違いないんです。



2. フォーク・さじ

そんな長い歴史を持つ生木の木工、グリーンウッドワークですが、きっと日本人の99%が聞いたこともないし、やったこともないと思います。こればかりは実際に生木を削った人にしかわからないんですが、生木を削っていると心が落ち着くんですね。



自分で作ったスプーンやお箸、フォークやお皿などで食べる食事は不思議とおいしく感じるものです。しかも、グリーンウッドワークの素材となる生



木は身近な森や庭の剪定枝、さらには台風 や積雪で折れた枝なども十分に使えるんです。

日本は山だらけ、森だらけ、木だらけなのに、どこか木は暮らしから遠く離れた存在となり、ホームセンターや東急ハンズでDIYの素材として購入するものになってしまいました。なんだか違和感を感じます。

—

地元の山の木を使って暮らしの道具づくりをすること。手間ひまをかけて自分でつくることは、実はとても贅沢な時間の過ごし方なんだと思うんです。



100円ショップで木のスプーンは買えますし、食器もいくらでもあります。だからこそ手作りのものは愛着が湧くんですね。生木ラボは全国民にスプーンの自作をおすすめしたいです。

ナイフや斧といった手道具で削るもよし、ウッドターニングでシュルシュルとうつわを削るもよし。

身近な山の木々を暮らしに取り入れることで、食卓に彩りが出ることまちがいなしです。



ウッドターニングという技法によるうつわづくりの様子

日本の2/3は森ですが、正直あまり使われていないような気がします。これは非常にもったいないので、ぜひ山やそこに生えている木に興味を持ってもらえたらなと思って生木ラボは活動しています。



米原市の木でつくる食器 市内の飲食店でご使用いただいています。

この展示を通して山や森のことを身近に感じてもらえたら何より嬉しいですし、生木の木工を始めてくれる人が一人でも増えたら最高だなと思っています。 作品について、あるいは生木ラボについて、何かご不明な点や質問がありましたら、どうぞお気軽にお問い合わせください。 使う人、つくる人によって、生木の輪が広がることを願っています。



スーパー生木ラボ

代表 鈴木孝平